

第1回京都らしい調度・備品有識者懇談会 会議録

日 時 平成28年8月12日（金） 9時30分～11時15分
会 場 国立京都国際会館 本館5階 R o o m 5 0 1
出席委員 柿野委員（座長）、大藪委員、尾崎委員、小山委員、佐藤委員、森口委員
事務局 総合企画局総合政策室
傍 聴 等 公開（傍聴者0名、報道関係者0名）／ 非公開

1 開会（進行：事務局）

- 開会挨拶
- 委員及び事務局の紹介
- 配布資料の確認

2 議題（進行：座長）

(1) 事業の概要について

ア 資料説明（説明：事務局）

○ 資料1 国立京都国際会館における「京都らしい設え」の実施について

国立京都国際会館は、昭和41年の開館以来今年で50周年を迎える。この間、京都にある地の利をいかし、様々な国際会議が開催され、COP3や世界水フォーラムなどの舞台になってきた。

しかしながら、今日の国際会議の大型化・多様化に対し、施設規模の面において対応が難しい状況となり、駐車場に仮設テントを建てて展示スペースを確保するといった厳しい対応を余儀なくされることとなっていたため、国際標準とも言える5,000人規模のホールの整備実現を目指し、京都市を中心にオール京都で国への要望を重ねてきた。その結果、まずは2,500人規模の施設整備の予算化が国でなされ、現在着手いただいているところである。

この新施設の一部に、本市と公益財団法人国立京都国際会館が連携し、京都ならではの付加価値として「京都らしい設え」を施すことにより、日本文化の発信はもとより、京都ならではの魅力を備えた本市独自のMICE戦略の推進、本市の伝統産業の振興につなげることを目的に、現在、取組を進めている。

「京都らしい設え」については、多目的ホールの顔とも言えるロビーや控室の内装と調度・備品に、京都の伝統産業や伝統工芸等をいかした設えを施すことにより具体化を図る。財団が施す「京都らしい内装」にふさわしい「京都らしい調度・備品」を本市が制作することとしている。

平成30年6月に多目的ホールが竣工する予定であるため、本市では、これに間に合うよう、「京都らしい調度・備品」の制作に向け、今年度、具体的な仕様や調達方法について検討を行うこととしている。検討に当たっては、本懇談会において専門的な見地から幅広い御意見、御提言をいただきながら取組を進めてまいりたいと考えている。

○ **資料2** 国立京都国際会館増築計画について

（1枚目：表紙）本資料は、近畿地方整備局において京都市美観風致審議会に諮問された資料の抜粋版である。

（2枚目：ページ番号1）赤線で囲まれた部分が国際会館の敷地であり、緑色で示している既存施設の④が本館、③がイベントホールである。その奥に赤色で着色されている駐車場部分に新しい施設が建設される。

（3枚目：ページ番号7）既存施設は、大谷幸夫氏の設計であり、周辺の比叡山や宝が池の自然環境にあらがうことなく、その中でうまく溶け込んで周辺の自然環境をいかし、また、補完するような役割を果たす施設を目指すことを基本的な設計思想としている。今回の新施設は、これまで50年間大切に守られてきた、このような設計思想、国際会館らしさを踏まえ、これからの50年につなぐデザインを目指すことをコンセプトとし、「既存建築との調和と革新」「豊かな自然環境に協調するデザイン」「多様性のある空間構成」の3つの方針を掲げて設計されている。

（4枚目：ページ番号8）建物のベースとなる基壇部分は、イベントホールの形状、質感を踏襲することを基本として設計されており、その上の屋根部分は、ガラスで覆ったようなデザインを採用している。既存施設との調和を図りながら革新的なデザインを目指すといった考え方で設計されている。また、今回の2,500人規模の施設は、イベントホールと軸線を合わせ、隣接して建設されるが、将来の増築を視野に増築スペースを確保したうえで計画されている。ホール内は、2,000㎡、2,500人が収容できる無柱空間であり、展示、イベント、式典、会議など様々な目的に使える多目的な展示施設になる。

（5枚目：ページ番号10）屋根の外側をガラスで覆う形状になっており、視線を通して周辺景観に調和させている。また、集熱や排気などガラス屋根により環境性能を付加しながら斬新なデザインを取り入れ、自然環境に協調するデザインとなっている。

（6枚目：ページ番号14）まずは連絡歩廊に入り、そこからホワイエ、ホールへと順に進むことになる。連絡歩廊は半屋外空間であり、外部の風や光を感じていただきながら中へ誘うものとなっている。ホールへ入る前にホワイエで一旦落ち着いていただき、中へと進んでいただく。日本建築の場の構成に倣い、連絡歩廊を縁側、ホワイエを入側、ホールをお座敷と捉え、多様性のある空間構成による設計がなされている。

（7枚目：ページ番号16）既存の築山をいかし、そこに植栽をすることで、新施設の前庭とする。連絡歩廊とホワイエの間には来館者をもてなすための庭を計画するとともに、イベントホールとの間には広場を設ける計画となっている。

（8枚目：ページ番号18）計画建物のうち、図中下側の細長い部分が連絡歩廊である。

（9枚目：ページ番号19）連絡歩廊からホワイエ、ホールへのつながりを御確認いただきたい。

（10枚目：ページ番号32）本館側、この部屋の辺りから見た完成予想パースであり、イベントホールの向こう側に新施設が完成する予定である。

○ **資料3** 国立京都国際会館における「京都らしい設え」のコンセプトについて

昨年度、森口委員、佐藤委員を中心に、中村昌生氏、樂吉左衛門氏にも御意見をお伺

いし、「京都らしい設え」のコンセプトをまとめた。それは、資料2で説明した建物の設計コンセプトと相互調和を図るかたちで、「伝統文化の本質・精神を踏まえ、革新を創造する」「自然との共生を体現する」「多様性のある豊かな空間を創出する」という3つの柱をコンセプトとしている。

イ 質疑応答

【座 長】 現在国際会館には、本館、アネックスホール、イベントホールがある中、今回新たに、2,500人規模の多目的ホールができるということだが、これら既存の他会場の収容人数と主要用途について確認したい。多目的ホールは、既存の他会場と何が違い、どのような特色を持たせるのか、具体的にどのような使い方をイメージして建設されるものか？

〔事務局〕 本館メインホールは、2,000㎡で1,840名収容、ホール内は4階吹き抜けで固定椅子が備えられており、基本的に会議専用のホールである。アネックスホールは、1,500㎡で可動間仕切壁により分割も可能である。展示や会議など多目的に使えるものであり、今回の新ホールと似たような目的を持ったホールである。

イベントホールは、3,000㎡あり、国際会館で最も広い展示スペースである。開館当時は国際会議に展示は伴わなかったが、現在は、医学系の学会を中心に医療器具等の関連展示を伴うケースが増えており、そのような展示をイベントホールで行っている。また、昇降式の舞台があるので、式典等にも活用している。

現在、展示スペースとしては、イベントホールとアネックスホールを合わせて4,500㎡であるが、主催者側から、5千～1万㎡の展示スペースを求められることも頻繁にある。これまでは、駐車場に仮設テントを設置し、そこを展示スペースとするなどしながら、大規模な国際会議を開催している状況である。今回の新ホールは、本館メインホールと同じく2,000㎡ではあるが、平土間の無柱空間になるので、展示スペースとしての使用や、舞台を設置してのイベント開催、レセプション会場としての使用、椅子を並べて会議を行うことも可能であり、まさに多目的な使用ができるホールを目指して建設されるものである。限られた敷地内で、1つの建物をいろいろな目的に使いながら、有効に活用しようという考えの下、新ホールを計画していただいている。

(2) 調度・備品の基本方針・イメージについて

ア 視察（案内・説明：財団職員）

資料4に掲載している調度・備品を中心に、既存施設内を視察

イ 意見交換

【座 長】 視察を踏まえ、新ホールに設置する調度・備品について、伝統工芸技術をどのように取り入れるか、グレード感や実用性など、制作に当たっての基

本方針，あるいは調度・備品のイメージについて，各委員から意見をいただければと思う。

【委員】 既存施設内は，積層合板を中心とした家具であるとか，いわゆる昭和モダンの雰囲気であるが，それとの調和はどのように考えているか？

〔事務局〕 基本的には，それぞれの施設の内装に応じた調度・備品ということもあるので，本館など既存のものとの連動性はベースにあってもよいと思うが，新しい施設は新しい施設としての内装ができるので，その内装に応じた調度・備品のデザイン，色，形を考えていただければと考えている。

【委員】 作品のキャプションが一部の作品のみに付いているのはなぜか？一般の方からすると，キャプションが付いていないと作品名等がわからない。美術館ではないので作品の前に大きく貼ると邪魔だということもあるが，キャプションが付いていることは大切である。

〔財団職員〕 元々は，キャプションは付いていなかったが，壁と一体化している作品の場合，利用者が設営する際に意識されないことが多く，作品の上に掲示物を貼ったり，画鋲を刺したりしたケースが過去にあったため，作品であることを意識していただき，そのような事態を防止するために一部の作品にキャプションを付けている。

【委員】 資料４の No. ４は，向かって左側のサインが入っている辺りは作品の一部と見る人はいないかもしれない。足元のバーが作品の途中までしか設けられていないのはおかしい。

〔財団職員〕 なるべく目立たないようなかたちとしたいとの思いがあり，足元にバーを設置するなどしている。

【委員】 家具など使用するものには付けないといった考えの下で付けていないのであれば別であるが，壁に掛かっているものなどには付けておかないと，逆に作品についての質問もあるかと思う。そういったものにキャプションが付いていないのはおかしい気がする。

【委員】 資料４の No. ４は，右側の大きな立体の木部に対して，左側の繊細で移ろいゆくような表現の対比がこの作品の最も大切な部分であるにも関わらず，あたかも作品でないような扱いになっている。

足元のバーを端まで伸ばして端にキャプションを付け，少なくとも題名，作者名，年号を入れるべきである。

A. A. A. グループの作品からは，６０年代，世界中が新しい美術を作ろうとしていた時代の息吹を感じることができる一方で，飾られている他の作品の中には，残念ながらこの建物には似合わないものもある。会館が持っているモニュメンタリティに対して敬意を払っていただきたい。

【委員】 視察したもの以外にも沢山の作品があるが，それ以外の作品については，本懇談会では議論外となるのか？それらを外したものをここで議論したとして，それでOKした，それらについては意見として出せない，となると問題と考える。

【座長】 今回は，多目的ホールに限定した話であり，国際会館全体の調度・備品に

関する懇談会ではない。既存施設内の調度・備品については、参考に視察したものである。それらに関しては、しかるべき機会があればその際に意見を出していただくといくことで、あくまでも今回は、視察したものを参考に、今回制作する多目的ホールの調度・備品について、既存施設内の調度・備品も念頭におきながら色々と皆様方に検討いただきたい。できるだけ違和感のないような調度・備品を作るにはどうしたらよいのかを議論いただくためのものと考えていただければよいかと思うので、よろしくお願いします。

【委員】 現在会館で収蔵しているもので資料４に載っていないものは他にもあるのか？

〔事務局〕 主なものを参考に御覧いただくために資料にしたものであり、掲載しているものが全てではない。

【委員】 収蔵品の中から活用できるものがあれば活用すればよい。また、イメージを変えろということでの現代アートを購入することも方針のひとつだと思う。

【委員】 伝統産業ふれあい館等にも何千品という多くの在庫があるが、そういったところと連携しているか？同じ市の組織ではあるが、違うストックという考え方か？

〔事務局〕 国際会館は国の施設で、国から市、市から財団へ運営の委託をしているものであり、市とは別主体であるので、現在はそういった仕組みはないが、今後連携して調度・備品をレンタル等することも考えられる。

【委員】 一度見学されたい。

【委員】 作品として価値のあるものでも、椅子や机などの家具類は、革の部分の傷みや角部分の塗りのはがれなど、非常に傷んでいる印象を受けた。傷んでいると周囲の雰囲気そのものにも影響するため、初期費用だけでなくメンテナンスに掛ける費用も重要になる。既存施設ではどの程度メンテナンス費用があり、新施設も同様にメンテナンス費用を掛けることはできるのか？そこを含めて考えないと、最初はきれいだけどしばらくすると美しくないというのではよくない。耐久性等を含めた選択が必要となる。

【座長】 潤沢にメンテナンス費用があればよいが、限られてくると思うので、耐久性についてもできるだけ念頭におきながら、新しいホールの設えを考えていただいた方がよい。

【委員】 プラスチック系は汚く劣化し、木質系・自然素材はきれいに劣化する。その辺りがひとつのポイントだとは思う。

【委員】 同じ劣化するにしても、良い古色や良い劣化の仕方をして、２０年、３０年後も、きちんとその美しさが見えるものであることが大切である。

〔事務局〕 基本的に建物・設備については、大きな改善・修繕・補修は国の予算で行われる。主に、建物や設備関係の大きな部分の改修については国土交通省、調度関係の購入・修繕については財務省の予算でそれぞれ実施されるが、賄いきれない部分については、財団の予算から捻出し、補修を行っている。

予算は潤沢ではなく、なかなか予算化されない現状にあるため、長期間のメンテナンス性を踏まえた素材選びなどメンテナンスの良さを踏まえたうえで色々と考えていただけるのはありがたい次第である。

【委員】 以前、別のプロジェクトの際にも申し上げたことであるが、メンテナンスを適切にしないと作品の価値が下がるため、購入費用と同程度にメンテナンス費用が必要である。

また、行政が芸術作品を発注するものではない。出来上がったものから購入すべきである。

さらに、アート作品を若い人の作品から選ぶとなると、しっかりとした委員会を作り、作品そのものを評価して選ばないといけない。いずれにしても、作家の名前でアート作品を論ずるのではなく、あの人のこの作品でいくらかということを論じないと議論とならない。

【委員】 アートに掛ける予算よりも造り付けの家具や椅子などにしっかり予算を回した方がよい。本来の目的は会議や展示をする場所であり、あまりアートがありすぎても邪魔になると思う。

また、家具類は基本的に既製品から買うことになるのか。

〔事務局〕 既製品を活用すると思うが、例えば布地の部分に西陣織を素材として使うなど、既製のもの＋伝統技能の活用といったことも考えられると思う。

【委員】 設えとしてしっかりと季節を表現するのかしないのか、するのであれば四季は欲しいところである。

【委員】 ホテルでは、季節に応じて替えなくてもよい作品を置いている。メンテナンスコストを抑えるため、メンテナンスにお金あまり掛からないものを最初から選んで置いている。基本的にガラスケースに入れるなどしていないため、絵画に水が付いたりしているところがあるが、メンテナンスするのに購入するのと同じくらいの費用が必要になることからそのままになっていたりでするので、そうなるのであれば最初からメンテナンスしやすいものを選んだ方がよいと思う。

本館内は、立派な作品がある一方で、その前にプラスチックの植木鉢に入った安っぽい観葉植物が置いてあったり、消火器がむき出しで置かれていたりと色々と気になる点があった。サインやキャプション、足元のバー、パーティションなどもバラバラで統一性がない。また、コンセントやコード類が各所で目に入り、せっかくの立派な設えも台無しになっている。こういった備品類を統一・整理することで、アート作品や設えもより際立ち、美しく見える。全体を見たときに美しく見えるようにした方がよい。

【座長】 もし季節で替えるのであれば年4回となるが、果たして四季でよいのか、もっときめ細かにすることもあり得るし、展示替えせずにモダンなものをずっと使うということも考えられる。

【委員】 レンタルフィーを出して京都市美術館から借りてくるようにすれば、もっと大胆に60年代の絵画を取り入れることなどもできる。そういったことができるのであれば、今わざわざ購入しなくてもよい。美術館には珠玉の

ものがたくさんあるので、美術運送に掛かる費用で、すごいものを借りることができる。ここには、それぐらいのものを教養として持っている方が訪れられると思う。四季に応じた日本画を買い揃えようと思っても、限りある予算の中では大したものを買えないだろう。それであれば机や椅子などにお金をかけた方が良い。それでももし何かしたいのであれば、例えば、写真作品の額装品を、四季か12箇月分コレクションしておけばよいと思う。

【委員】 京都造形芸術大学では、アート作品を貸し出し、貸し出したものを販売につなげる取組をするなど色々がんばっている。

アート作品の購入に当たっては、そこにふさわしいか、コンセプトがあるかななどを、しっかりとした委員会で話し合い、よくよく検討したうえで決めないと、結果として残念なことになることも多い。

【委員】 美術館から迎賓館へは貸出をしており、国の担当者とやり取りをして選定を進めるが、来館そのものがキャンセルになってしまうこともあり、出し入れなど結構大変なことも多い。例えば、半年間貸し出すということであれば、美術館としても計画を立てる必要がある。

【委員】 貸出を行うのであれば、レンタルフィーもメンテナンスフィーもきちんと貰うべきである。外国の美術館は、高いがきちんと貸してくれる。

美術館で会議をする国もあるくらい美術は大事なので、大事だからこそ、軽んじて美術家に任すなどと言うべきでない。アート作品についてはくれぐれも注意し、人ではなく作品本位で選んでいただきたい。作家にとってはどれも大事な作品であるので、昔の作品を譲って欲しいと言っても何も失礼ではない。この場所に欲しいというものをしっかりと選んでいただきたい。

【座長】 今回、伝統技術・伝統工芸を活用して伝統産業の振興を図ることが目的のひとつであるが、どういう伝統工芸が関わることができるのか、あらゆるものが関わることができるものか？

【委員】 パーツで言えば組紐なども関わることはできるが、主に、金属、石、木、漆などある程度限定されると思われる。

【委員】 西陣織は汚れたら入れ替えることを前提として扱う必要がある。友禅を直接用いることはもってのほかではあるが、図案などそういった形で関わればよいと思う。漆も常にきれいにしておこうと思うと扱いは簡単ではない。

【委員】 本来の目的は、会議をしたり、人が集まる場所であるので、アート作品よりも、使う机や椅子、棚などにいかに京都の伝統産業の力を発揮するか、そちらの方にお金をかけた方がよいと考える。例えばアート作品等については、国際会館にふさわしいものがあれば借りてきて飾る。そして、設えとして、雰囲気作りとして、調度品に京都の伝統産業品を使ったものを加えていくと、京都の伝統産業がいかされるのではないと思う。設置する場所等によってはおそらく採用が厳しいものもある。劣化やどれ

だけの時間置けるかなどを考えて検討すべきである。

- 【座 長】 「京風」ではなく「本物」の、京都そのものの設えをしていただきたい。そこにはやはり京都の伝統工芸がかなり噛んでいただく方がふさわしくなると思う。京都はまさに日本の文化の宝庫であり、京都の文化を分かれば日本の文化が分かるし、京都の文化を通してまた地方・地域の文化も学んでいくということにつながる。
- 【委 員】 若い人たちがここに来れば「これが京都なんだ」ということがビジュアルに理解できることが大切だと思う。職人仕事にあまりこだわりすぎると「これが京都か」ということにもなるのでその辺が難しいところである。
- 【座 長】 多目的ホールのイメージに合ったものでないといけない。伝統産業製品だけが浮いたかたちになるのは避けるべきである。
- 【委 員】 将来の伝統産業のためにも、取って付けたようなものは絶対に避けなければならない。しっかりと現在の空間に生きているものでないといけない。
- 【座 長】 本懇談会できちんと議論し、これはダメ、これはこういう風にすれば活用できる、これは是非ともいきたいなど、そういった議論をいただくことが大事だと考える。
- 【委 員】 素材にかなり左右されると思うので、同じ木工でも京都の木工、あるいは漆でも京都の塗り、京都の金工の仕上げはこうだということを、資料を集め、素材見本等を並べてビジュアルで提示して、一般的な工芸と何が違うのか見てわかるようにし、これが京都だというものを共通論議した方がよい。
- 【委 員】 議論する場合は、写真などを用いてできるだけ具体的に提示した方がよい。その際は、値段も確認してから俎上に載せること。
- 〔事務局〕 本日頂戴した御意見を踏まえ、次回の懇談会では、用いる伝統技術や素材について、具体的なイメージを示しながら進めていくこととする。